



サモア語、タヒチ語、ハワイ語の名詞的小辞の対照研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2015-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Polynesian languages, Nominal particles, Prepositions, Articles 作成者: 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3784

サモア語、タヒチ語、ハワイ語の名詞的小辞の対照研究

その他（別言語等） のタイトル	A Contrastive Study of Nominal Particles in Samoan, Tahitian, and Hawaiian
著者	塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	64
ページ	99-108
発行年	2015-03-13
URL	http://hdl.handle.net/10258/3784

サモア語、タヒチ語、ハワイ語の名詞的小辞の対照研究

塩谷 亨^{*1}

A Contrastive Study of Nominal Particles in Samoan, Tahitian, and Hawaiian

Toru SHIONOYA ^{*1}

(原稿受付日 平成 26 年 6 月 27 日 論文受理日 平成 27 年 1 月 22 日)

Abstract

In this paper, nominal particles, especially prepositions and articles, in Samoan, Tahitian, and Hawaiian are examined. Since Polynesian languages derived from a common proto-language, they have many cognate nominal particles. This paper attempts to compare the usage between cognate prepositions and articles in order to illustrate similarity and difference among them. In doing so, the predicate use of each preposition/article and the co-occurrence of prepositions and articles are investigated with focusing on four groups of cognate prepositions and two groups of cognate articles. This paper shows the neutral case preposition 'o (<*ko) and the ablative preposition mai (<*mai) are distinct from other prepositions in that they can form a predicate noun phrase in all three languages and that they do not take a tense-aspect marker, which is essential to many types of predicate phrases.

Keywords : Polynesian languages, Nominal particles, Prepositions, Articles

1 はじめに

1.1 分析対象言語

ポリネシア諸語は起源を同じくする同系言語のグループであり、南太平洋を中心として、一部北太平洋まで含めた広い海域に分布している。お互いに広大な海により隔てられているにもかかわらず、ポリネシア諸語同士は文法的・語彙的に類似性が強い。本稿では、ポリネシア諸語のうち、北部に位置するハワイ語、東部に位置するタヒチ語、西部に位置するサモア語と、地域的に離れている三つの言語を取り上げる。ハワイ語はマルケサス語群、タヒチ語はタヒチ語群、サモア語はサモア・域外ポリネシア語群と、それぞれ、ポリネシア諸語内の異なる下位グループに属している。本稿は、

地域的にも離れていて、系統的にも異なる下位区分的に属するこれら三つのポリネシア諸語を対照することにより、ポリネシア諸語の全体像に近づこうと試みるものである。

1.2 ポリネシア諸語の基本文構造

ポリネシア諸語の典型的な語順は<述語 - (主語) - (その他)>である。このうち<述語>は必須要素である。<述語>は名詞句又は動詞句のいずれかであり、<主語>及び<その他>はいずれも名詞句である。以下、例文及び表中では、サモア語、タヒチ語、ハワイ語をそれぞれ S、T、H と略記する。

(1) 述語名詞句 — 主語名詞句

(S) 'O Malia \emptyset lona igoa.(T) 'O Māria \emptyset tona i'oa.

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

- (H) 'O Malia \emptyset kona inoa.
 (無格) マリア (主/絶対格) 彼女の 名前
 「彼女の名前はマリアです。」

例(1)は「彼女の名前はマリアです。」という文をサモア語、タヒチ語、ハワイ語の三つのポリネシア諸語でそれぞれ表したもので、名詞句が<述語>になる例である。文は外来の人名「マリア」を含む四つの単語で構成されている。このうち、三言語で形式的に完全に一致している文頭の無格の前置詞'oはもちろん同系である。無格の前置詞'oは述語名詞句に付加される他、トピック名詞句にも付加されたり、主格・絶対格のように明示的な格表示がない名詞句にも付加される場合がある。いずれの場合でも、特定の格を表示することはないので、無格の前置詞と呼ぶ。また、音韻的に対応している所有形 lona~tona~kona「彼女の」と名詞 igoa ~i'oa ~inoa「名前」も、いずれも同起源の単語である。

また、単語の配列が完全に一致していることからわかるように、これら三つの文は、文法的にも同じ構造をもつものとして分析される。尚、主格又は絶対格の名詞句は \emptyset でマークされている。

上記の(1)では'O Malia/ 'O Māriaがそれぞれ述語名詞句であり、 \emptyset lona igoa / \emptyset tona i'oa / \emptyset kona inoaがそれぞれ主語名詞句である。名詞句及び動詞句はそれぞれ名詞、動詞を中核とし、それに、様々な小辞が付加されて形成される。小辞とはそれ自身が単独では動詞句や名詞句を形成することが出来ず、必ず名詞又は動詞に伴って用いられる語類である。(1)では述語名詞句冒頭の無格の前置詞'oが小辞に属する。

- (2) 述語動詞句 — その他の名詞句
 (S) ua alu atu i Patanarama.
 (完了) 行く(方向) ~に パダンアラム
 (T) 'ua reva i Padanarama.
 (完了) 発つ ~に パダンアラム
 (H) ua hala aku la i Padanarama.
 (完了) 去る(方向) (指示詞) ~に パダンアラム
 「(彼が)パダンアラムに行った。」創世記(28:7)

例(2)は旧約聖書の同じ個所のそれぞれの言語での翻訳である。本稿では、聖書からの引用については、他の文献とは異なり書物名(章:段落)のように表記する。いずれの言語でも、動詞句が<述

語>になり、<主語>が省かれ、後ろにくその他>の名詞句が続いている。述語動詞句はいずれの言語でも、完了の指標 ua~'ua で始まっているが、これも音韻的に対応する同起源の単語である。この完了の指標 ua~'ua も小辞である。

1.3 ポリネシア諸語の三種類の小辞

ポリネシア諸語には様々な機能や意味を持った小辞が存在するが、本稿では、Milner (1966:xxvii) により示された三つの分類を用いる。

(3) ポリネシア諸語の小辞の分類

- (a) 名詞的小辞: 名詞の前後に付加される。冠詞、前置詞などを含む。
 (b) 動詞的小辞: 動詞の前後に付加される。時制・アスペクト指標などを含む。
 (c) 一般的小辞: 名詞的小辞とも動詞的小辞とも共起できる。強調辞等副詞的なものを含む。

例(1)の無格の前置詞'oが名詞的小辞、例(2)の完了指標 ua~'ua が動詞的小辞の例である。一般的小辞の例としては、例(2)のサモア語とハワイ語の例で動詞の後ろに付加されていた方向詞 atu~akuがある。方向詞は、おおまかにいうと、「近づく、遠ざかる、上方へ、下方へ」等の方向性の意味を添える小辞であり、例(2)のように動詞の後ろに付加されるほか、名詞の後ろにも付加される。例(2)で用いられた atu~aku は、「遠ざかる」方向性を示す方向詞であり「(ここから離れて) パダンアラムに行った」という意味を表している。

1.4 本研究の考察対象

1.4.1. 名詞的小辞

本稿では三つのタイプの小辞のうち、名詞的小辞に焦点を当てる。ポリネシア諸語の名詞的小辞は、名詞に前置されるものと、後置されるものに分類される。名詞に前置されるものには、前置詞、冠詞、複数指標の三つが含まれ、名詞に後置されるものには、集合指標(人間を表す名詞に後置して、「~達、~とその仲間」のような意味を表す)、呼格(「~さん・~よ」のような呼びかけで用いる)の二つが含まれる。

(4) ポリネシア諸語の名詞句の構造

前置詞-冠詞-複数指標 -名詞-集合指標-呼格

このうち、前置詞と冠詞は全てのポリネシア諸語が持っている。

前置詞-冠詞 - 名詞
 (5S) i le lagi
 (5T) i te ra'i
 (5H) i ka lani
 ～に (定) 天
 「天に」

また、名詞に後置される呼格も多くのポリネシア諸語で見られる一般的なものであり、今回の分析対象である三言語共に持っている。

(6S) Vili e!
 ヴィリ (呼格)
 「ヴィリよ！」
 Mosel & Hovdhaugen (1992:193)
 (6T) E Terii ē!
 (呼格) テリイ(呼格)
 「テリイよ」 Lazard & Peltzer (2000:201)
 (6H) Ē pua ē!
 (呼格) プア(呼格)
 「プアよ！」 Elbert & Pukiui (1979:147)

例(6S,6T,6H)はいずれも人名の後ろに呼格が付加されている。タヒチ語とハワイ語では名詞の前にも呼格の前置詞として同形の e/ē が付加されている。尚、Mosel & Hovdhaugen (1992:193)は呼格の e を名詞的小辞ではなく接尾辞と分析している。

一方、複数指標と集合指標はタヒチ語とハワイ語には見られるが、サモア語には見られない。

(7T) E mau 'oire ato'a anei ...?
 (不定)(複数) 町 ～も (疑問)
 「(いくつかの) 町もありますか。」
 Saint-Exupéry (2006:52)
 (7H) He mau mea maika'i nō na'e.
 (不定)(複数) もの 良い (強調)
 「実に良いものだ。」 Beckwith (2007:9)
 (8T) E 'aiū mā!
 (呼格) 赤ん坊 (集合)
 「おーい、赤ん坊たち。」 Saint-Exupéry (2006:24)

(8H) Ē Kipunuiiakamau mā,...
 (呼格) キプヌイアイアカマヌ (集合)

「おーい、キプヌイアイアカマヌ達...」
 Fornander (1916-1917:123)

例(7T,7H)では複数指標 mau が名詞の前に置かれている。例(8T, 8H) では複数指標 mā が名詞の後に置かれている。

ここまでの比較の結果をまとめると次のようになる。

	前置			後置	
	前置詞	冠詞	複数指標	集合指標	呼格
S	○	○	×	×	○
T	○	○	○	○	○
H	○	○	○	○	○

(9)名詞的小辞の有無

以上のように、タヒチ語とハワイ語は一致しているのに対して、サモア語は複数指標と集合指標がない点で他の二言語と異なっている。

ハワイ語はマルケサス語群、タヒチ語はタヒチ語群と異なる下位区分に属しているが、この二つの語群は共に東部ポリネシア諸語という上位区分に属しており、サモア語と分岐した後に生じた変化を共有しているため、このように、サモア語には見られない共通の要素がハワイ語とタヒチ語に見られる場合がある。

本稿では、名詞的小辞のうち、多くのポリネシア諸語が同起源の形式を共有している前置詞と冠詞について論じる。その中でも、以下の表(10)と(11)に示すように、Clark (1976)によりポリネシア祖語まで遡れると指摘され、三言語で同系と認められる5セットの前置詞と、2つの冠詞を今回の分析対象とする。明示的な形式を持たない \emptyset は除外する。

祖語	意味	S	T	H
* \emptyset	主格/(S)絶対格	\emptyset	\emptyset	\emptyset
*e	行為者格/(S)能格	e	e	e
*i / *ki	対格/所格/与格	i ~'i	i	i
*mai	起点「～から」	mai	mai	mai
*a/*o	所有「～の」	a/o	a/o	a/o
*ko	無格	'o	'o	'o

(10)祖語まで遡れる前置詞一覧

上の表中で(S)を付したのはサモア語の能格型格表示で用いられる場合の意味である。サモア語は他

動詞の一部で能格型の格表示を持つ。対格/所格/与格の前置詞は元々 *i / *ki の二つであったのが、言語によっては一つの形 i に統合され、結果として前置詞 i は多機能になっている。

祖語	意味	S	T	H
*te	定	le	te	ke/ka
*sa	不定	se	e	he

(11)祖語まで遡れる冠詞一覧

これらはいずれも元々同系であったとされる小辞である。従って、それらを対照することにより、元々同じであったはずの意味・用法がどのように変わっていったかが示されると期待される。

1.4.2 対照する項目

Clark (1976)でも指摘されているように、ポリネシア祖語まで遡れる名詞的小辞のそれぞれの表す意味については大きな差はない。そこで、本稿では、意味ではなく、文中での機能と、共起関係的に絞って対照を行う。

文中の機能としては、述語用法に着目する。既に例(1)でも見たように、ポリネシア諸語においては、動詞句だけではなく、前置詞や冠詞が導く名詞句が述語になる場合がある。しかしながら、全ての言語で、全ての前置詞又は冠詞が述語名詞句を導けるわけではない。そこで、それぞれの言語でどの前置詞あるいは冠詞が述語を導くのか分析する。

Mosel & Hovdhaugen (1992:406)がサモア語について指摘しているように言語によっては、前置詞あるいは冠詞が導く名詞句をあたかも一つの動詞のように扱い、本来は動詞に付加される動詞的小辞である時制・アスペクト指標を用いて、擬似動詞句のような形で述語として用いる場合がある。

(12S) 'Ua i luga le lā.

(完了)(所格)上 (定) 太陽

「太陽が昇った。」 Milner (1966:115)

'ua は例(2)でも登場したが、完了を表す時制/相指標の一つで、動詞的小辞に属するものである。例(12S)では前置詞 i が導く名詞句 i luga 「上に」が動詞のごとく扱われ、その前に動詞的小辞の一つである時制指標 'ua (完了)が付加されて擬似動詞句のような形で述語をなしている。これについても、

どの言語のどの前置詞あるいは冠詞でこのような用法があるのか分析する。

もう一つの対照の視点である共起関係については、どの前置詞がどの冠詞と共起するのかについて分析する。

1.4.3 分析に用いたデータ及びその表記法

今回の分析対象言語のうち、ハワイ語では現在純粋なネイティブスピーカーから生の言語データを収集するのは極めて困難な状況にあるが、幸い、19世紀半ば以降に正書法が確立し多数の文献資料が残されている。そこで、条件を統一するため、今回の分析データを専ら文献資料から取った。

今回用いた資料には、聖書及びキリスト教関連文献 {文献一覧の(2)、(4)、(5)、(22)}、伝説・民間伝承・歴史・物語 {文献一覧の(3)、(8)、(9)、(10)、(11)、(14)、(17)、(18)、(19)、(21)}、及び、それぞれの言語についての先行研究である辞書及び文法書 {文献一覧の(1)、(7)、(12)、(13)、(15)、(16)} が含まれる。

表記法はそれぞれの言語において、最も一般的に用いられている正書法により表記する。尚、表記中に用いられている記号 (◌̣) は声門閉鎖音を表すものである。又、ポリネシア諸語の正書法において用いられるものではないが、例示の都合上、明示的な形式を持たない形態を表記する必要がある場合に、ゼロ記号 (∅) を用いて表した。

2 前置詞が導く名詞句の述語用法について

2.1 名詞句として

2.1.1 サモア語

サモア語においては、無格の前置詞 'o と起点の前置詞 mai が述語名詞句を形成している例がある。以下、本節では、述語名詞句を下線で表記する。

(13S) 'O le ulu lenei.

(無格)(定)パンノキ これ

「これはパンノキだ。」

Steubel & Herman (1987:11)

(14S) Mai lēfea nu'u 'ea 'oe ?

(起点) どの 村 (疑問) あなた

「あなたはどの村からですか。」

サムエル記下(15:2)

例(13S)と(14S)では、'o le ulu 「パンノキだ」と Mai

lēfea nu‘u ‘ea 「どの村からですか」がそれぞれ前置詞に導かれる述語名詞句となっている。

2.1.2 タヒチ語

タヒチ語においても、無格の前置詞‘o と起点の前置詞 mai が述語名詞句を形成している例がある他、所有の前置詞 o/a が述語名詞句を形成している例もある。

- (15T) ‘O te taote tei haere mai.
(無格)(定)医師 (関係詞)来る (方向)
「来たのは医師です。」
Lazard et Peltzer (2000:35)
- (16T) Mai Huahine mai te mau ‘orometua.
(起点) Huahine (方向)(定)(複数) 教員
「教員達はフアヒネ島からです。」
Lazard et Peltzer (2000:192)
- (17T) O Tama terā fare ‘āpī.
(所有)Tama あの 家 新しい
「あの新しい家は Tama のです。」
Lazard et Peltzer (2000:193)
- (18T) A rāua terā fa‘a‘apu.
(所有)彼らあの 畑
「あの畑は彼らのです。」
Lazard et Peltzer (2000:194)

例(15T)-(18T)で、それぞれ下線部が前置詞に導かれる述語名詞句である。

2.1.3 ハワイ語

ハワイ語においては、無格の前置詞‘o と起点の前置詞 mai が述語名詞句を形成している例がある他、所/与/対格の前置詞 i が述語名詞句を形成している例もある。

- (19H) ‘O ke ana ka hale o kekahi po‘e...
(無格)(定)洞窟 (定)家 (所有) ある 人々
「ある人達の家は洞窟だ。」 Malo (1987:82)
- (20H) Mai Hawai‘i mai nei au,...
(起点)ハワイ (方向)(指示詞) 私
「私はハワイからです。」
Fornander (1918-9:567)
- (21H) I hea au, i uka, i kai, ...?
(所格)どこ 私 (所格) 山方 (所格) 海方
「私はどこに？山方に、海方に...」
Fornander (1918-9:141)

例(19H)-(21H)で、それぞれ下線部が前置詞に導か

れる述語名詞句である。

2.2 擬似動詞句として

2.2.1 サモア語

サモア語においては、所有の前置詞 a/o と所/与/対格の前置詞 i/i が時制/相指標の付加を伴って述語を成す例がある。

- (22S) E a Feleti le ta‘avale.
(未完了)(所有) Faleti (定) 車
「車はファレティののです。」
Mosel & Hovdhaugen (1992:408)
- (23S) Sā i Apia lo mātou tinā...
(過去)(所格)Apia 私たちの 母
「私たちの母はアピアにいた。」
Mosel & Hovdhaugen (1992:408)

例(22S)で、所有の前置詞 a が導く名詞句 a Faleti「ファレティの」が動詞句のように扱われ、前に動詞的小辞に属する未完了の時制/相指標 e が付加され、述語を成している。例(23S)でも、所格の前置詞 i が導く名詞句 i Apia「アピアに」が動詞句のように扱われ、前に動詞的小辞に属する過去の時制/相指標 sā が付加され、述語を成している。

2.2.2 タヒチ語

タヒチ語においては、明示的に<時制/相指標+前置詞+名詞>という形で述語名詞句を導く例は見られなかったが、その代りに、未来における場所等を表す ei、現在における場所等を表す tei、過去における場所等を表す i という三つの小辞が述語名詞句を導く。これらの形については、Lazard et Peltzer (1991:21)が、ei と tei は未完了の時制/相指標 e、現在の時制/相指標 tē と前置詞 i がそれぞれ結びついた形であるとの分析を提示し、Ross (1976:35) は、マオリ語の同様の小辞について、i は*i(過去)と前置詞 i が、tei は*tee(現在)と前置詞 i がそれぞれ結びついた形であるという分析を示した。これらを総合するとタヒチ語の三つの形 ei、tei、i はそれぞれ次のように分析される。

ei (未来の場所)	未完了 e と前置詞 i が融合
tei(現在の場所)	現在の tē と前置詞 i が融合
i (過去の場所)	完了の i と前置詞 i が融合

(24)タヒチ語の小辞 ei、tei、i

この分析はこれらの小辞の意味を適切に説明する

ことができる。

(25T) Ei _____ te ta'ata tīa'i ra
(未完了-所格)(定) 警備員 (指示詞)

te tāviri

(冠詞)鍵

「鍵は警備員にあるだろう。」

Lazard et Peltzer (2000:43)

(26T) Tei _____ te fare ta'u tipu
(現在-所格)(定)家 私のナイフ

「私のナイフは家にある。」

Académie tahitienne (1986:433)

(27T) I _____ te fare nei _____ te taote.
(完了-所格)(定) 家 (指示詞) (定) 医師

「医師は家にいた。」

Lazard et Peltzer (2000:43)

上記の例で、それぞれ(24)で示したように、前置詞の前に時制/相指標が付加されているとすると、いずれも、前置詞 *i* が導く名詞句が動詞句のごとく扱われ、動詞的小辞に属する時制/相指標を付加した擬似動詞句として述語を成していると分析される。

2.2.3 ハワイ語

ハワイ語においては該当する例は見つからなかった。上述のタヒチ語の例文は、主に、存在文的な意味の例文である。ハワイ語は、Elbert and Pukui (1979:54)が指摘しているように、前置詞述語文に限らず、存在を表す文においては時制/相指標と共に起しない傾向がある。

3 冠詞が導く名詞句の述語用法について

3.1 名詞句として

3.1.1 サモア語

サモア語では該当する例は見つからなかった。

3.1.2 タヒチ語

タヒチ語においては、不定冠詞 *e* が導く名詞句が述語を成す。

(28T) E _____ manu terā.

(不定) 鳥 あれ

「あれは鳥だ。」 Lazard et Peltzer (1991:36)

例(28T)では、不定冠詞 *e* が導く名詞句 *e manu* 「鳥だ」が述語となっている。

3.1.3 ハワイ語

タヒチ語と同様、ハワイ語においても、不定冠詞 *he* が導く名詞句が述語を成す。

(29H) He _____ kumu 'o Pua.

(不定) 教師 (無格) Pua

「プアは教師だ。」 Elbert & Pukui (1979:156)

例(29H)では、不定冠詞 *he* が導く名詞句 *he kumu* 「教師だ」が述語となっている。

3.2 擬似動詞句として

3.2.1 サモア語

サモア語においては、Mosel & Hovdhaugen (1992:404)が不定冠詞、特に単数、に時制/相指標が付いて、「~のようだ」のような意味を表す述語となる例を挙げている。

(30S) Ua _____ se va'a tū matagi.

(完了)(不定) 船 立つ 風

「風に立つ船のようだ。」

Mosel & Hovdhaugen (1992:404)

例(30S)では、不定冠詞 *se* に導かれる *se va'a tū matagi* 「風に立つ船」が動詞句のように扱われ、前に完了の時制/相指標 *ua* が付加されて、疑似動詞句として述語を成している。

定冠詞の導く名詞句に時制/相指標が付加される例は見られなかった。

今回の分析対象ではないが、不定冠詞単数以外に、不定冠詞複数の前に時制/相指標が付加され疑似動詞句として述語を成している例があった。

(31S) Ua _____ ni solofanua po'a e pepeti

(完了)(不定)馬 雄の (未完了)太った

i lātou

(人称) 彼ら

「彼らは太った牡馬のようだった。」

エレミヤ書(5:8)

例(31S)では、不定冠詞複数 *ni* が導く名詞句 *ni solofanua po'a e pepeti* 「太っていて雄の複数の馬」の前に完了の時制/相指標 *ua* が付加されて、疑似動詞句として述語を成している。

3.2.2 タヒチ語

タヒチ語においては該当する例は発見されな

った。

3.2.3 ハワイ語

ハワイ語においては該当する例は発見されなかった。

4 前置詞と冠詞の共起について

4.1 サモア語

サモア語においては定冠詞 *le* と不定冠詞 *se* は全ての前置詞と共起する。以下、本節では該当する前置詞句を下線で表記する。

(32S) 'a e talia e le tamaita'i,
そして(未完了)受け入れる(能格)(定)婦人
「そして、婦人が(それを)受け入れて...」
Kramer (1995:31)

(33S) E lē iloa fo'i
(未完了)(否定)知っている も
e se tagata...
(能格)(不定) 人
「人は誰も知らない。」
Steubel & Herman (1987:48)

(34S) Na oso i lalo le tama
(過去)飛ぶ(所格)下 (定) 子供
mai le solofanua...
(方向)(定) 馬
「子供が馬から飛び降りた。」
Mosel & Hovdhaugen (1992:147)

(35S) mai se tusi a Iosefa Samita
(起点)(不定)手紙(所有)Iosefa Samita
「Iosefa Samita の手紙から (の引用)」
The Church of Jesus Christ of Latter-day
Saints (2007:47)

(36S) 'O le Tala o le Taua o le Uso
(無格)(定)話 (所有)(定)戦い(所有)(定) 兄弟
「兄弟の戦いの話。」 Kramer (1995:29)

(37S) se mavaega a se Ali'i Sili
(不定)遺言 (所有)(不定)領主 高位の
「高位の領主の遺言」 Henry (1980:115)

(38S) ma tu'u i le tanoa
そして 置く (所格)(定) ボウル
「そしてボウルの中に入れる。」
Kramer (1995:22)

(39S) ...sui i se tanoa 'ava, ..
ミックスする(所格)(不定)ボウル カヴァ
「カヴァ(サモアの伝統飲料)用ボウルで(カ

ヴァを)ミックスする。」 Kramer (1995:554)

(40S) 'O le Tala o le Taua o le Uso
(無格)(定)話 (所有)(定)戦い(所有)(定) 兄弟
「兄弟の戦いの話。」 Kramer (1995:29)

(41S) 'O se ā lā lou mana'o?
(無格)(不定) 何(疑問) あなたの 望み
「あなたの望みは何ですか。」 Moyle (1983:284)

4.2 タヒチ語

タヒチ語においては、定冠詞 *te* は全ての前置詞と共起するが、不定冠詞 *e* はどれとも共起しない。

(42T) 'Ua hāmani-hia e te tamuta
(完了)作る-(受身)(行為者)(定) 大工
tō matou fare.
私たちの 家
「大工が私たちの家を作った。」
Lazard et Peltzer (2000:66)

(43T) mai te matahiti 1825 mai
(起点) (定) 年 (方向)
「1825年から」 Musée (2001:8)

(44T) 'O te fare o te 'orometua terā.
(無格)(定)家 (所有)(定) 教師 あれ
「あれは教師の家だ。」
Lazard et Peltzer (2000:175)

(45T) 'Ua haere 'o Petero i te fare.
(完了)行く (無格)Petero (所格)(定) 家
「ペテロは家に行った。」
Lazard et Peltzer (2000:64)

(46T) 'O te fare o te 'orometua terā.
(無格)(定)家 (所有)(定) 教師 あれ
「あれは教師の家だ。」
Lazard et Peltzer (2000:175)

下線部で示すように、定冠詞 *te* は全ての前置詞と共起している。一方、不定冠詞 *e* が共起する例は見られない。

4.3 ハワイ語

タヒチ語と同様、ハワイ語語においても、定冠詞 *ka/ke* は全ての前置詞と共起するが、不定冠詞 *he* はどれとも共起しない。

(47H) Ke 'aina maila e ka manu.
(現在)食べる-(受身)(方向)(行為者)(定)鳥
「鳥によって食べられている。」

Elbert & Pukui (1979:146)

(48H) mai ka wā kahiko mai, ...
(起点)(定) 時 昔の (方向)

「昔から...」 Beckwith (2007:149)

(49H) ka hale o ke ali'i
(定) 家 (所有)(定) 領主

「領主の家」 Elbert & Pukui (1979:136)

(50H) Ua makemake au i ka hale.
(完了)欲しい 私(対格)(定) 家

「私は家が欲しかった。」

Elbert & Pukui (1979:98)

(51H) O ke ali'i nō ia.
(無格)(定) 領主(強調) 彼

「彼がまさに領主だ。」

Elbert & Pukui (1979:132)

このように、定冠詞は三つの言語で今回調べた全ての前置詞と共に起すのに対して、不定冠詞はサモア語では全ての前置詞と共に起すが、ハワイ語とタヒチ語では不定冠詞は前置詞と共に起さない。

前節で述べたように、タヒチ語とハワイ語において、不定冠詞には述語を導く用法がある。そのことが、不定冠詞が付いた名詞句について、他の名詞句とは異なる制約を引き起こしている可能性がある。

5 考察

5.1 前置詞が述語名詞句を導く場合

今回調べた6セットの前置詞のうち、*i/*kiに由来する前置詞、*a/*oに由来する前置詞、*maiに由来する前置詞、*koに由来する前置詞が、いずれかの言語で述語名詞句を導く用法を持っている。その中でも、無格の前置詞'oと起点の前置詞maiと他の前置詞との間に大きな断絶が見られた。無格の前置詞'oと起点の前置詞maiはいずれの言語でも、述語名詞句を導くという機能を持っている。

	所有 (a/o)	所/与/対格 (i/i')	起点 (mai)	無格 (‘o)
S	TA+P+N		P+N	
T	P+N	{TA+P}+N (融合形)		
H	該当無し	P+N		

{N:名詞、P:前置詞、TA:時制/相指標}

(52)前置詞が述語名詞句を導く時の形式

所有と所/与/対格の前置詞については、言語によって様々であるが、サモア語ではそれらの両方について<時制/相+前置詞>という形を用いたのに対して、ハワイ語では、<時制/相+前置詞>という形が一切なかった点に対照的であった。一方、タヒチ語では、所/与/対格を<時制/相+前置詞>の形式で、所有を<前置詞>のみという形式で用いるという点で、サモア語とハワイ語の中間的な様相を呈していると言える。

5.2 冠詞が述語名詞句を導く場合

定冠詞については、いずれの言語でも、述語名詞句を導く例が見られなかった。

	定冠詞	不定冠詞
S	該当無し	TA+A+N
T		A+N
H		

{N:名詞、A:冠詞、TA:時制/相指標}

(53)冠詞が述語名詞句を導く時の形式

不定冠詞については、サモア語では、冠詞だけでは述語名詞句を導くことはないが、時制/相指標を前に付加することで述語をなすことがあり、一方、タヒチ語とハワイ語では、不定冠詞だけで述語名詞句を導くことができる。

5.3 前置詞と冠詞の共起

三つの言語全てにおいて、今回調べた全ての前置詞と定冠詞が共起する。一方、不定冠詞については、サモア語では全ての前置詞と共に起すが、タヒチ語及ハワイ語では不定冠詞はどの前置詞とも共起しない。ここでも、サモア語と他の二つの言語の間に大きな差が見られた。

6 結び

6.1. まとめ

前置詞の中でも、無格の前置詞'oと起点の前置詞maiは三つ全ての言語で、名詞述語を導くことができ、その際には、時制/相指標は付加されないという点で一貫していた。しかしながら、その他の前置詞については、1) 述語名詞句を形成できるか否か、更に、2) 形成できる場合には時制/相指標の付加が必要か否か、という二つの点で多様性を示していた。

このようなことから、ポリネシア諸語の前置詞については、述語形成機能をもつ前置詞と述語形成機能を持たない前置詞の二種類を区別するのが適当と思われる。前者は、前置詞に述語形成機能があるため、＜前置詞+名詞＞の形で述語をなし、後者は、それ自体には述語形成機能がないため、述語形成機能をもつ時制/相指標を付加し＜時制/相指標+前置詞+名詞＞の形で述語を成す。

以下に、今回の分析対象となった前置詞について、述語形成機能の有無の一覧を示す。それ自体述語形成機能があるものは+、時制/相指標の付加により述語を形成するものは(+)、そもそも述語を成さないものは-で表す。

	S	T	H	述語に なりにくい
e	-	-	-	
a/o	(+)	+	-	
i/i	(+)	(+)	+	
mai	+	+	+	
‘o	+	+	+	

(54) 今回の分析対象前置詞の述語形成機能

このように、最も述語になりやすい前置詞‘oと mai から、最もなりにくい前置詞 e まで、述語になりやすさの連続体が示された。このうち無格の‘o はその主たる機能が述語名詞句を導く機能であり、最も述語に成りやすいのは当然のことである。それ以外の前置詞については、場所や方向などを表す前置詞 mai/i/i が、純粋に文法的な機能を表す e/a/o よりも述語になりやすいという傾向が示されている。これは、純粋に文法的な機能を表す前置詞よりも副詞的な機能を表す前置詞の方が、意味的に独立性が高く、従って、述語となりやすいということを示唆しているとも考えられる。

サモア語の不定冠詞はそれ自体では述語を導く機能もなく、様々な前置詞と共起できることから、より不定冠詞的であると言える。述語を導く場合には時制/相指標の付加により、擬似動詞句として用いられる。一方、タヒチ語とハワイ語における不定冠詞は、前置詞との共起ができないことから、もはや冠詞としての性質は希薄となり、むしろ述語名詞句の形成という機能が強くなっている。実際、Académie tahitienne (1986)、Lazard et Peltzer (1991)及び(2000)のように、近年のタヒチ語の分析では、e は不定冠詞ではなく、全く独立の範疇として扱われている。

6.2. 今後の課題

タヒチ語の所/与/対格の前置詞 i が述語名詞句を導く場合に用いられる三つの形式 ei、tei、i の存在は示唆的である。これらの形が Clark (1976:35)や Lazard et Peltzer (1991:21)が示した分析のように、それぞれ、時制/相指標と前置詞の融合形であるなら、同様の説明が、タヒチ語とハワイ語の不定冠詞にも適用できる可能性がある。

すなわち、元々はサモア語の不定冠詞のように述語形成機能を持たない純粋な冠詞であったタヒチ語とハワイ語の不定冠詞に、述語を導く機能を持つ何らかの時制/相指標、或いは、同じく述語を導く機能をもつ無格の前置詞‘o などの機能が融合した、として説明が可能と思われる。

このような分析によれば、タヒチ語とハワイ語の不定冠詞が、時制/相指標や前置詞と共起しないことがうまく説明される。Shionoya(2009)ではハワイ語の不定冠詞 he は元々の不定冠詞と無格の前置詞‘o の機能が統合したとして分析していたが、今回、もう一つの可能性として、時制/相指標、例えば、未完了の e 等の機能が不定冠詞に統合したという分析の可能性が示された。

謝辞

本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C) 「ポリネシア諸語における様々な小辞の機能・用法に見られる差異について」(課題番号: 25370455 研究代表者: 塩谷亨) による研究成果の一部である。また、二名の匿名の査読委員の方々から貴重なコメントを頂いた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

文献

- (1) Académie tahitienne. 1986. Grammaire de la langue tahitienne. Papeete: Fare Vanaa.
- (2) American Bible Society. 1993. Baibala Hemolele. New York.
- (3) Beckwith, Martha W. 2007. Kepelino's Traditions of Hawaii. Honolulu: Bishop Museum Press.
- (4) Bible Society in the South Pacific. 1969. O le Tusi Paia. Suva.
- (5) Bible Society in the South Pacific. 1997. Te Parau a te Atua. Suva.
- (6) Clark, Ross. 1976. Aspects of Proto-Polynesian Syntax. Linguistic Society of New Zealand
- (7) Elbert, Samuel H. and Mary K. Pukui. 1979. Hawaiian Grammar. Honolulu: University of Hawaii Press.
- (8) Fornander, Abraham. 1916-1917. Fornander Collection of Hawaiian Antiquities and Folk-Lore. Vol. 4.

- Honolulu: Bishop Museum Press.
- (9) Fornander, Abraham. 1918-1919. Fornander Collection of Hawaiian Antiquities and Folk-Lore. Vol. 5. Honolulu: Bishop Museum Press.
- (10) Henry, Alii Felela Fred. 1980. *Talafaasolopito o Samoa*. Apia: Commercial Printers. Translated into Samoan by Faifeau T. K. Faletose.
- (11) Kramer, Augustin. 1995. *The Samoa Islands*. Vol.1. Honolulu: University of Hawai Press. Translated by Theodore Verhaaren.
- (12) Lazard, Gilbert et Louise Peltzer. 1991. *Predicates in Tahitian*. *Oceanic Linguistics* Vol.30 No.1, 1-31.
- (13) Lazard, Gilbert et Louise Peltzer. 2000. *Structure de la langue tahitienne*. Paris: Peeters.
- (14) Malo, Davida. 1987. *Ka Mo'olelo Hawai'i*. Honolulu: Kapiolani Community College.
- (15) Milner, G. B. 1966. *Samoa Dictionary*. London: Oxford Universtoty Press.
- (16) Mosel, Ulrike and Even Hovdhaugen. 1992. *Samoa Reference Grammar*. Oslo: Scandinavian University Press.
- (17) Moyle, Richard. 1983. *Fagogo: Fables from Samoa*. Auckland: Auckland University Press
- (18) Musée de Tahiti et des îles. 2001. *Tahiti 1842-1848*. Punaauia: Musée de Tahiti et des îles
- (19) Saint-Exupéry, de Antoine. 2006. *Te tamaiti ari'i iti*. Translated into Tahitian by John Faatae Martin. Papeete: Haere Po.
- (20) Shionoya, Toru. 2009. *Hawaiian he as a prenominal / verbal particle*. *Language and Linguistics in Oceania* Vol.1, 1-12.
- (21) Steubel, C. and Brother Herman. 1987. *Tala O le Vavau*. Auckland: Pasifika Press.
- (22) The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. 2007. *Aoaoga A Peresitene O Le Ekalesia Iosefa Samita*. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. A PDF version downloaded on Jan. 1, 2014.